

片倉 邦雄

イスラームは若返るか？

分化した細胞を胎盤まで若返りさせる万能細胞「発見」のニュースで世のなかは一時湧いた。がん対策にも役立つという期待がかかっていた。

ユダヤ教、キリスト教の後を受け七世紀にアラビア半島で生まれた一神教イスラームの世界では、政教一致の共同体「ウンマ」を理想の姿として掲げた。預言者モハンマドの生きていた時代を正義、公正、福祉と秩序が実現された「あらまほし」き社会像として夢み、ウンマへの忠誠心を軸に連帯することを目指してきた。その後、近代に入り今日に至るまで、イスラーム世界はウンマを「幹細胞」として、欧米列強のセキユラーな世界観の洗礼を受けつつ、議会民主主義、軍事独裁、共和制、王制などに分化してゆき、さらに不幸にも暴力志向の過激テロ組織というガン細胞さえも派生するに至っている。

「アラブの春」は、強権独裁政治の継続、貧富の格差拡大、腐敗汚職、高い失業率などを誘因として一般民衆が自然発生的に起こした改革運動だった。その結果、一時期は、イスラーム体制への回帰、「ウンマ」再興へのベクトルも生まれた。いまやだれでも容易に入手可能となったメディアや情報通信手段が、あたかも「酸性液」として働き、すでに派生分化した各種組織を一旦「ウンマ」という幹細胞に戻すという兆候が一旦あらわれたともいえる。

しかし、エジプトにおけるムスリム同胞団のケースのように、権力の座についたものの、政権運営の不慣れ、特に経済政策の不手際、さらにアラブ社会特有のDNAとして根づいてきた

部族連帯意識（アサビーヤ）あるいはその亜流、利益集団志向も災いして、イスラーム系政権の実験はいずれも頓挫している。そのうえ、イスラーム回帰か否かという一次方程式だけでおさまらないのは、従来のアラブ・イスラエル対立構造に加えて、スンナ・シーア両派分裂の様相、そして共和制対王制の力関係も不安定要因として常に潜在しているからだ。

他方、イスラームの二大聖地を要するサウジアラビアを中心とするGCC湾岸諸王国の安全保障環境に目を転じてみると、アラブの春は一部バーレーンなどで反政府大衆運動として顕在化したのが、全体としては不発に終わっている。ただ、ハード面では、一九七〇年代には杞憂と思われていたエネルギー供給システムの中断・物理的破壊が一九八〇年代以降イラン・イラク戦争、湾岸戦争勃発などの機会に大規模油田火災、ミサイルの応酬、タンカー戦争という形で発生したことを改めて想起すると、ソフト面の安全保障についても決して安心してはられない。グローバル化の挑戦を克服し、ソフトランドディングを実現するためには、まだまだ政権の安定性、正統性をめぐり大きな課題を抱えているといってもよい。

イスラーム以前のDNAを引き継いでいる部族・王族支配のもと、潤沢なオイルマネーばらまきの効果で、これまで沈黙してきた一般大衆が近い将来、既存秩序に飽き足らず、「酸性液」の媒介で、ウンマ理念を復興、実体化させようとするか否か、微妙な安全保障環境の変化には目が離せない。

かたくら くにお／日本エネルギー経済研究所理事、日本イスラーム協会理事

1933年東京生まれ。宮城県出身。60年東京大学法学部卒業、外務省入省アラビア語研修官補、英国王立国際問題研究所（チャタム・ハウス）研究員、駐UAE、イラク、エジプト大使、第2回東京アフリカ開発会議政府代表を歴任、1999年退官。大東文化大学国際関係学部教授を経て、現職。著書に『人質とともに生きて』、『トン考ーヒトとブタをめぐる愛憎の文化史』、『アラビスト外交官の中東回想録』など。